大阪府立千里高等学校
平成 29 年度 第１回スーパーグローバルハイスクール(SGH)運営指導委員会　＜記録＞

1.　**日時**:平成29年10月17日　11時35分～12時25分

2.　**場所**:千里高校　校長室

3.　**出席者**:

〇運営指導委員

久　　隆浩　　委員　近畿大学 総合社会学部環境・まちづくり系専攻　教授
藤本　英子　　委員　京都市立芸術大学 美術学部　教授
森田　直樹　　委員　吹田市立高野台中学校　校長
松下　信之　　委員　大阪府教育センター 高等学校教育推進室　指導主事

〇管理機関・大阪府教育庁

香月　孝治　　教育振興室 高等学校課　教務グループ　主任指導主事

〇千里高校

松本　　透　　校長
堀辺　慶一　　教頭
大西　千尋　　首席(SGH 事業推進主担当・英語)
村上　晃　　教諭(SGH 委員・「探究」担当・社会)
野村　真理　　教諭(「トピック・スタディズ」担当・英語)
今岡　仁美　　教諭(「探究」担当・英語)
江口　拓馬　　教諭(「探究」担当・国語)

4.　**次第**:

1，校長挨拶
2，委員紹介
3，委員長の選出
4，本校の SGH 事業の取組状況報告―別紙資料に基づいて
　1)　前回の委員会以降の実績報告と今後の計画
　2)　2年間の自己評価と文部科学省による評価
　3)　課題
5，指導助言

5.　**資料**（末尾に掲載）

＜資料１＞事業計画について昨年度との変更点をお示しします。
＜資料２＞文部科学省が先月末に発表した平成２７年度指定校に対する中間評価について、自己評価票総合評価部分および本校に対する評価とともに、高評価を受けた高校へのコメントに沿って本校の取り組み状況をお示しします。
＜資料３＞昨年度いただいたご助言に沿って取り組み状況をお示しします。

第2回運営指導委員会予定　平成30年2月９日(金)

6.　主な助言

① 中間発表について

・発表がこなれてきた。

・ビジュアル資料をもっと活用するとよい。あれば具体的にイメージできる。この場（運営指導委員会）でも、「見える化」をすることによって具体的なアドバイスができる。

・テーマの絞り込みをさせる指導が大事。絞り込むことによって問題に入り込むことができる。

・児童虐待や家庭の支援は中学でも直面している課題だ。地元をもっと活用すると良い。高野台小学校・中学校・市民センターなど連携が可能な資源がある。

・参考文献の数が増えていると感じた。

② SGH 研究開発の効果について

・SGH の取組は他の科目の指導法の変化に繋がっているだろうか。

・SGH の取組の中でどのような学習の姿があるだろうか。

③ 連携について

・海外の高校との連携については、高・大・民間といろいろなチャンネルがある。

・ポスト SGH では、複数の学校で手を挙げることが求められるとの見方もある。大学もコンソーシアムを組織している。

④「中間評価」について

・同じことを行なっていても、どのように評価・運営を行なっているかで評価が変わってくる。評価をする側の目から見たときのポイントは、「エビデンス」と「システム」だ。

「エビデンス」：アンケートの結果＋声のリストアップ

「システム化」：誰と誰が連携し、全体としてどう動いているか。「見える化」する。

⑤ カリキュラムと教員組織について

・公開することで、チームビルディングを進めることができる。例えば、全教員がアクティブラーニングをしよう、というムードを作るのに重要な役割を果たす可能性がある。学校協議会をそのように位置付けることもできる。２月の実践報告会もそのような位置付けをすると良い。

・学校としてカリキュラムをきちんと検討しているだろうか。

カリキュラム＝・ポリシー（教育目標）　←これが第１。
　　・ツリー（科目体系図）　←科目全体がどう繋がって目標を達成するのか。

この２つを「見える化」して共有するのがよい。
つまり、明確な方針を立て、各科目がその方針のどこに位置付くのかを共有する。（↔教えたいことを教える）

・これと並行して、大学ではファカルティディベロプメントのシステム化に取り組んでいる。目標と戦略を共有するとともに、人材育成・開発にも組織的に取り組む＝チームビルディングとい

うことだ。

具体的には、全体の学習会・アンケート・リフレクションペーパー・ピアレビュー（学科内の相互授業参観）を組織的・体系的に行おうとしている。

大学教員のファカルティディベロップメントについて

〇ファカルティ・ディベロップメント

…教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。その意味するところは極めて広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる。

〇ファカルティ・ディベロップメントに関する主な法令上の規定

…「新時代の大学院教育－国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて－」（平成 17 年 9 月 5 日中央教育審議会答申）を受けて、大学院設置基準において義務化（平成 19 年 4 月 1 日より施行）。

出典：文部科学省.中央教育審議会 大学分科会 制度部会（第 21 回（第 3 期第 6 回））議事録・配付資料 ［資料 5－1］. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/003/gijiroku/06102415/004.htm

・外部人材の活用も積極的に検討すると良い。忙しい部分をどう外に振っていくか。これにより戦略を練る時間を確保しつつ、今以上の成果が期待できる。大学教員に来てもらうこともできるし、研究室に行くこともできる。「大学コンソーシアム大阪」に依頼することもできる。

大学コンソーシアム大阪

大学コンソーシアム大阪は、平成 11 年に 31 大学により設立された大阪府内大学学長会を前身とした、大阪府内の 4 年制（6 年制）大学で構成される団体です。平成 19 年 8 月に特定非営利活動法人（NPO 法人）になり、現在 42 の会員を擁して多様な活動を行っています。本法人は、大阪府内およびその周辺の大学の相互連携を深めるとともに、地域社会・産業界・行政と協力しあって、地域社会に貢献し、お互いの連携を強めること、国際交流を進めることを目的としています。その目的達成のために、高大連携、大学間連携、インターンシップ、国際交流、地域連携等の活動を進めています。

大学コンソーシアム大阪. 法人概要 ｜ 大学コンソーシアム大阪. http://www.consortium-osaka.gr.jp/about/

⑥ その他の助言

・海外研修は、コネクションのある人を活用すれば色々な地域・内容を考えることができる。

・ターゲットが明確にされた研究にするには、テーマの枠をはめることが重要。

・経験と勘を、システムに。

・SGH に取組み、いかに学校の仕組み・授業が変わってきたかが問われている。

・ホワイトボードを使ってテーマを公開することで、他の先生や生徒を巻き込んでいくことができる。ぜひ、運用を開始してもらいたい。

＜資料1＞今年度の事業計画について

①昨年度からの主な変更点

・学習成果発表会「千里フェスタ」の最終日を土曜日 2/9 とする。

→生徒の発表を他の SGH 校の教員に公開

・同日の生徒解散後に他校教員向けの報告会を開く。

→まとめと共有・他校教員からの評価を期待

1. 本校の沿革・特長と SGH 構想
2. 課題研究「探究基礎」と「探究」
3. 課題研究を発展させる授業外の取組
4. 英語コミュニケーションの授業
5. 分科会（グループに分かれ補足説明、質疑・応答、意見交換）

②前回の運営指導委員会から現在までの主な実施経過

- ２月下旬　「探究」論文提出
- 3月１９日 全国スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会（２年生５組６名参加）
  →日本語プレゼンテーションの部で最優秀賞を受賞。教材利用の依頼複数。
- 3月下旬　『SGH 研究開発実践レポート』・『課題研究「探究」論文集』を作成・公開
- 同　　SGH 実施体制について職員会議で要請・了承
  →学年・課題研究担当者・教科で業務分担へ
- 同　　中間評価のための自己評価票等を作成・提出
- 同　　『本校の課題研究と専門科目の紹介【日英対訳】』を作成・公開
- 同　　「探究」担当者会議①
  →テストごとの定例化・複数研究を推奨する方向を確認
- ４月上旬　「国際理解」担当者と１，２年担任団に年間指導計画を説明・協力依頼
- 同　　Deeper Active Learning ワーキンググループ発足
- ４月２２日大阪大学大学院国際公共政策研究科国際公共コンファレンス（２年生１組２名参加）
- ５月中旬　「探究」担当者会議②
  →共通ルーブリックを合意、生徒にも伝える
- 同　　「Active Learning の背景と基本」についての教員研修実施
  →１１月に「授業相互見学」、２月に教員研修（実践編）予定
- ６月中旬　１年「国際理解」ゲスト授業①「高校生の日常と国際的な課題のつながり」
  →グループワークを取入れて実施＝生徒が発表する時間を作る
- ７月　７日1年講演『人々のストーリーを描く～国際問題の研究者から高１生へのメッセージ』
  →委員の生徒が、クラスでの紹介・司会・質問をする形で実施
- ８月上旬　夏季グローカルセミナー（１年生３０名参加・昨年並み）
  →社会課題に取組むコリア国際学園の生徒による話に感化
  →国際人権の学習で privilege walk,哲学対話等の体感型研修の導入
- ８月中旬　大阪大国際公共政策研究科 Future Global Leaders’ Camp（２年生７人参加・増）
- ８月下旬　「国連グローバル・コンパクト」署名団体に
  →SGH テーマ堅持の決意表明／連携強化・研修機会／活用には人的資源必要
- ９月中旬　１年「国際理解」ゲスト授業②「社会課題とどう向き合うか～公害の事例から考える～」
  →ロールプレイでの指示がさらに要所を押さえたものに／一部生徒の変質も
- １０月上旬　NY 研修選考　過去の研修参加実績＋日英小論文で（２年生１９人が応募・倍増）
- １０月上旬　企業・大学訪問研修　（１１ヶ所に１，２年生 101 人が訪問。139 人が希望・倍増）

＜資料2＞文部科学省が先月末に発表した平成27年度指定校に対する中間評価について

①本校に対する評価および自己評価票関連部分

■講評：
○課題研究を中心とした教育を学校に根付かせ、生徒の変容などの面で成果をあげており、中間時点での課題の明確化、事業終了後の教育の継承・発展の展望がなされている点が評価できる。
○また、ＨＰに実践記録等を掲載し、実践を公開していること等は、大変進んでいると評価できる。
○しかし、課題研究や成果の検証方法が生徒アンケートに偏っており、アンケート結果はＳＧＨの成果か判断が難しいものもあるため、特に課題研究の取組や成果については、具体的な生徒の探究の姿での提示など今後は改善が必要である。

■全体評価：
これまでの努力を継続することによって、研究開発のねらいの達成がおおむね可能と判断されるものの、併せて取組改善の努力も求められる。

■自己評価票関連部分

⑤成果の分析・普及等の評価	成果と課題の分析，検証	研究の課題や研究のねらいに対応した，ＳＧＨ指定前後の生徒の変容（学習意欲，進路の状況等を含む）が見られたかどうか。	グローバルな課題に取り組む人たちと直接触れあう機会や見学・実習を多く取り入れることにより，生徒は研究へのモチベーションを維持するとともに進路や生き方について思索を深める。	「学校教育自己診断アンケート」で，「『探究』の時間は知的好奇心を高めている」への国際文化科2年生の肯定的回答はSGH指定前3年間の平均69%から約10ポイント上昇し80%に達した。（よくあてはまる 34%，ややあてはまる 46%，あまりあてはまらない 15%，全くあてはまらない 5%）。また，民間教育産業のテスト（昨年5月実施の3年生対象マーク模試）では，国際文化科生徒の平均偏差値が，国語・数ⅡB において指定前3年間の平均に比べ，それぞれ1.9，1.7ポイント向上している。さらに，大学入試センターテストでは，国際文化科3年生の，全国平均を 100 とした場合の得点率が，国語・リスニングにおいて，指定前3年間の平均に比べ，それぞれ13ポイント，8ポイント向上している。課題研究が知的好奇心をより刺激するものになっている。また，間接的に国語の学力に好影響を与えている可能性もある。
		ＳＧＨの取組を通じて，グローバル人材育成の重要性の認識等，教員の意識の変容が見られたかどうか。	国際文化科の教育理念としてSGHの目標としてあげる力を位置づけ，これを意識した教育活動が広がる。	教員アンケートの「SGH の指導の中でグローバル人材育成の意味の理解が進んだ。」に「よくあてはまる」「ややあてはまる」と回答したのはそれぞれ 17%，59%で，4分の3の教員が理解が進んだと感じている。また，「思考力を重視した問題解決型の学習指導を行うこともある」への「よく…」「やや…」への回答の合計は75%から87%に12ポイント増加している。＜資料(7)＞
		仮説に基づく成果や課	仮説に基づき生徒・課題研究担当	アウトカム・アウトプットの報告項目に加え，本校の仮説に基づく成果を評価できるようアンケート項目を検討し実施した。今年度

		題の分析が適切に行われているかどうか。	者・教員全体を対象にアンケート等を行い評価する。	は運営指導委員からの指摘を受け，目標とする力が入学後にどれくらい伸びたか，また，個別の事業の各目標への貢献度を尋ねるよう改善し実施した。

＜資料2＞文部科学省が先月末に発表した平成27年度指定校に対する中間評価について

②高評価を受けた高校へのコメントと本校の取り組み状況

京都府立鳥羽高等学校

○探究のプロセスにのっとった外国語の習得及び活用は極めて高く評価できる。生徒の視野は確実に広がっており、生徒の成長でも事業の基準を十分に満たした効果をあげている。

本校：　・探究のプロセスと外国語の習得・活用のリンクは考慮されていない。

・生徒の視野の広がりを測定していない。

○また、同様に大学と連携しアクティブ・ラーニングを軸とした活動の実施やアクティブ・ラーニングへの指導法転換が取組を支えている点も極めて高く評価できる。

本校：　・課題研究の指導は、主体的・能動的・協働的な学習を促進するものとなっている。

→しかし、自己評価票でこの点についての記載が不十分だった。

○とりわけ、PDCAサイクルが実質的に機能しており、特に成果の検証については、独自のルーブリックや生徒自身の相対的成長実感を問うアンケート、授業評価などの多様な方法が用いられており、SGH校のモデルとなり得る取組である。

本校：　・成果の検証として使ったのは「生徒自身の相対的成長実感を問うアンケート」のみだった。

→「ルーブリックを使った教員および生徒による評価」、「授業についての生徒による評価」は、その準備ができたので、成果の検証の方法として利用していきたい。節目ごとにルーブリックを見ながら教員と生徒が共に学習を振り返る姿をイメージして行いたい。これはかつて運営指導委員会で提案をいただいていながら、十分に実施できていなかった。

大阪府立豊中高等学校

○生徒の主体性を尊重し能動的な学習展開がみられる。海外研修でのフィールドワークも探究の課題に基づいて行われている点は高く評価できる。

本校：　・テーマの選択や研究計画の立案において主体性を重視している。学習展開も能動的であると認識している。

→豊中高校の学習展開の様子を学び、取り入れるべきことを確かめる必要がある。また、能動性をどう評価して、どう記述したのかも知る必要がある。

本校：　・どの講座を選択した生徒にも海外研修の機会を閉ざさないように制度設計したために、関連が不明確になっている。

→当初の構想に忠実に従い、海外研修の目的を、課題研究でテーマとしている「企業の人権・環境・労働・腐敗防止に関する取組み」について「日米比較を行う」ためと限定することが必要となる。

○また、教員相互の授業見学が実施され、課題研究の指導法は各教科・科目へアクティブ・ラーニングの取組として波及している点も高く評価できる。

本校：　・複数の教科でアクティブ・ラーニングが試みられており、その例も記述した。また、教員相互の授業見学も行っている。しかし、質的・量的に大きな動きとはまだなっておらず、記述も実態に即したものとなった。

→能動的・主体的・協働的な学習は、学校の存在意義を再定義する活動として魅力的である。豊中高校での例を参考にするとともに、今年度立ち上げたワーキンググループを中心に研修を組み、また、教員相互の授業見学など、試みを促す動きを進めていくとよい。

＜資料3＞昨年度いただいたご助言に沿って取り組み状況をお示しします。

【発表について】

① 発表されていた研究に関わる**事例が地元にたくさん**ある。**ぜひ取材に**行くとよい。

→指導担当者には促していますが、学校で設定した企業訪問以外には取材に行っていません。

【全校化について】

② そこに行けば「探究」で何が行われているのかがわかる「場所」があることは重要。

→ホワイトボードを確保し、物は準備できました。

③ 「今こんな手助けが欲しい」と発信して、資源を持っている先生を生徒が巻き込んでいくのがいい。そういうつながりが増えていくと、課題研究で何をやっているのかが全体に見えるようになる。クラブとの調整もスムーズになることが期待できる。

④ 先生全員が自己紹介を生徒に公開するのも一つの方法だ。大学での専攻や興味をもっていることがわかると、相談にのってもらいやすくなる。意外な趣味を持っていることがわかって、先生同士の相互理解も進む。

→魅力的ですが、余裕がなく未着手です。

⑤ チーム指導を発展させるには、話し合う機会を増やすしかない。30 分から1時間じっくり話して情報交換する。これを繰り返すと自ずとビジョンが共有される。SGH はチームビルディングのきっかけだと考えると良い。時間がかかるので大変だが、「誰のためなのか、生徒のためだ」と考えれば動くことを納得してもらえると思う。

⑥ 「そう言われれば、こんな生徒の変化があった」といったことを拾い上げることは重要。勤務している大学では専攻内の会議を3時間かけてじっくりやっている。また、3ヶ月に一回は、専攻横断談話会をやっている。

→課題研究「探究」の担当者会議をテストごとに定例化しました。また、随時集まるようにしています。

【評価について】

⑦ 個人の自己評価シートがあると良い。それを見て、ここが足りないなと感じた時に相談できる。

⑧ 勤務している大学では、まず学生が自分で目標を書き、担任が相談に乗り一緒に設定する。そしてその後は、半年ごとに進捗を確認し、助言する。文字化することで客体化でき、学生と教員が一緒に検討し、斜め上からのアドバイスが言える／聞ける。

→ルーブリックを共通化し、早い時期に生徒に渡しました。それを使って話をする時間を設定するなど、活用方法に改善の余地があります。

⑨ 学習の歩みの記録を残し、見返せるように、クリアファイルを使ってポートフォリオを作る方法も良い。

→今年度からクリアファイルを購入し全員が持つことにしました。参考文献の書き方やルーブリック、各回の進行プリントなどを入れています。ポートフォリオとしての使い方を意識させる必要があります。パソコン上で全て終わらせてしまいがちなので、レポートはプリントアウトして残すなどの指示が必要だと思われます。

⑩ 自己評価と他者評価を組み合わせた「ルーブリックに頼らない」評価を、三国ヶ丘高校は試みている。

→研究が進んでいません。鳥羽高校のものと合わせて、評価の見直しができればと思います。

⑪ 「この生徒はこう変わった」ということがわかるストーリー／エピソードも、評価者に対して説得力がある。

→アドバイスをいただいておきながら、この点について材料不足で、記述できず、中間評価で指摘を受けました。他校の評価方法の中にもヒントがありそうです。

⑫ アンケートの文章分析（テキストマイニング）という手法もある。

→最終授業で書いてもらったアンケートにはいい内容がありました。拾う方法の研究が必要です。

⑬　できていないことをきちんと書き出すことで、要因分析をし、対策が立てられる。PDCA を回すためには、重要なことだ。

→この点は評価されました。しかし、対策の方向は見えていながら、実現できずにスタートの時期が来てしまう事が多く残念です。

⑭　グローバルリーダーを育てられたかどうかを評価するのは難しいことだが、試案を立てて評価を試みることで見えてくる事がある。評価法を評価するという姿勢で試みてもらいたい。

→学年末に向けて試みます。

【サステナビリティーについて】

⑮　SGH は更新がないことが明らかになった。持続可能になるように、人材育成システムを作って欲しい。指定後を見据えて、学外団体で基金を作っている他県の高校もある。

→来年度具体的に考えられるように、今年度末に何を残しいくら掛かるかを確認したいと思います。ボランティアで行っていただいている企画は、継続が可能ですし、卒業生や国連グローバル・コンパクトのつながりを活用する道も見えてきています。

⑯　来年は千里フェスタ「学習成果発表会」を土曜日に開催するのなら、広く同窓生に呼びかけるとよい。卒業生はどんなことをやっているのかに興味があるので来る人も多いだろう。そこで必要な情報を持っている人が見つかるかもしれない。財政面での援助も期待できる。→卒業生とのつながりを活性化して学校の資源として活用する試みを「ホームカミングデー」と名付けて行っている大学も多い。

→今年度についてまだ同窓会には相談をしていませんでした。今年度は同窓会の Facebook で伝えていただく等の方法でおこない、来年度以降は年度当初から予定に組み込んでいただいて可能なら同窓生と教員の懇談の場を設けるなど発展させた形について相談できればと思います。

全体を振り返りますと、今年度かなり進めたものの、分業体制がまだ不十分で、昨年までの業務をこなすだけで余力がなくなり、いただいたご提案を活かして事業をレベルアップ、発展させることができていない状況を改めて認識いたしました。年を追うごとに何らかの形で関わった経験のある教員が増え、仕事を任せやすくなっています。そして、任せることによってより良い活動に成るように工夫が付け加えられていくこともわかってきました。今後も分業・全校化をすすめることで、豊かでより完成度の高い活動としたいと考えております。